日刊 動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合
〒260-0017 千葉市中央区要町2番8号（DC会館）
電話（鉄電） 千葉2935・2939番
（公） 043(222)7207番
FAX 043(224)7197番

2000.11.2 No. 5218

今こそ、闘う動労千葉に結集しよう

JR総連に何が起きているのか 上

JR総連九州労 組織崩壊！

10月5日、JR総連九州労から六五二人が一斉に集団脱退した。10月17日にはさらに八六名が脱退し、脱退者は組合員の八割にあたる七三八名に達している。九州労は実質的に崩壊・消滅した。しかもこれは、会社やJR連合もその実態をまったくつかんでいない状況のもとで起きている。

一体何が起きているのか、起きている事態は何を意味するのか。――この組織崩壊は、JR総連を支配してきた革マルの内部分裂に端を発したものだ。

危機にたつ革マルの醜い仲間割れ

JR東日本で松田社長が更迭され、大塚社長体制がつくられたように、革マルは明らかにJR会社や政府・権力から使い捨てられようとしている。これは彼らにとって身の凍るようなことだ。今回の事態の本質は、こうした危機を前にして革マルがついに醜い仲間われをはじめたということだ。とくに、JR東日本の革マル結託体制を守るために一切を従わせようとする、松崎のやり方をめぐって、革マル内に収拾のつかない分裂が生まれているのだ。

組合員を犠牲にしつつ、全国に波及

今JR総連は、JRに働く労働者の権利や利害、切実な要求とは全く関係ないところで繰り広げられる革マルの内部抗争によって自壊しようとしている。革マル同士が罵詈雑言の限りを尽くしてののしり合うのは勝手だが、彼らがやっている抗争は、自らが生き延びるために、現場の組合員をどこまでも犠牲にするということだ。JR総連内に渦まく革マル支配への不満の声、怒りの声、怨嗟の声を力で抑えつけ、組合員を犠牲にしながら、どちらがより一層会社や権力の手先になるのかを争っているのだ。

しかもこれは、九州だけの特殊な問題ではない。東労組をはじめ、全国のJR総連内で同様の抗争が、隠然・公然と始まっている。JR総連の革マル支配は内部から腐り、最後的な崩壊過程に入っている。

いまこそ力を合わせて、JRに闘う労働組合を再生させよう。労働組合は現場で働く組合員のためにあるものだ。JR総連を牛耳るごく一部の革マル系役員のために組合員がいるわけではない。ましてや、JRと革マル癒着・結託体制を維持するために組合員を犠牲にし、将棋の駒とするようなことは絶対に許せない。

集団脱退劇――組織崩壊の実態

九州労の集団脱退は、10月5日、四名の代表者が、六百数十名の脱退者名簿をもって、JR連合への加入申請をするというかたちで明らかとなった。先頭にたった四名は、九州労の福岡、鹿児島、熊本地本の各委員長と大分地本書記長である。また10月17日に脱退を表明した八六名は、長崎地本が中心で、やはり地本委員長を先頭に脱退している。そればかりか、革マル派はその機関紙などで、「首謀者は北委員長だ」と、九州労本部三役を非難している。つまり本部三役も脱退届を受けとるためにのみ残留している状態だ。

しかも彼らは、いずれもバリバリの革マル活動家だと言われてきた者たちだ。集団脱退した者たちは、その声明で、**「独善的な組織運営」「職場の引き回し」「革マル疑惑体質は何ら改善されない」「革マルの介入を手引きする者が明らかとなった」**等を脱退の理由としてあげている。つまり、革マルの組織内部から批判の声が噴き上げ、行き着くところまで行き着いたということだ。

一方現場には、革マル支配に対する怒りの声、不満の声が渦まいており、この分裂は予想をこえて一気に組織の八割が脱退するという事態に至ったというのが真相である。

10月9日には、東日本から神保など、古参の革マル分子が九州労にのり込み、怒声・暴言を繰り返し、暴力をふるい、組織重要書類を窃盗するという事件まで起きている。

こうした実態のなかで、JR連合九州労組も、加入届を保留し、未だ加入を受け付けていない状況にある。

革マル派の対応は

一方革マル派は、その機関紙などで、**「四人組によるクーデターを打ち砕け」「JR総連解体の総攻撃が始まった！」「下からのイデオロギー闘争を推進せよ」「『脱退届』に署名してしまった組合員は自らの愚かさを自覚せよ」**等、危機感を丸だしにして絶叫しつづている。

だが、その宣伝のなかでも、JR総連のなかに**「『松崎会長は過去の人だ』『山本勝彦（革マル派の独裁者：黒田寛一のこと）は変質した』などとほざいて、反感を植えつけるということをやっている」者がいる、「JR総連ならびに各単産・地方本部の役員たちは拱手傍観し、どこ吹く風を決めこんでいる」**等、革マルの分裂がJR総連傘下の労組すべてで起きていることを自認している。